

『はいずみ』追考

——二人妻説話の系譜の中の小さな反乱——

井 上 新 子

はじめに

堤中納言物語中の一編『はいずみ』は、歌徳説話的な趣きのある物語であるとも、また二人妻説話の系譜にある物語であるとも言われている。ゆえに、そうした物語の伝統の中での比較を行なうことによつて、『はいずみ』の物語としての本質をみきわめようとする試みがなされてきた¹⁾。

近年、竹村信治氏は、堤中納言物語中の諸作品の引用の分析の帰結がパロディとして一括されることに警告を發し、そうした方法論に到達する前に物語の中に展開された「他者との対話」に耳を傾ける必要性を説いた。氏は、他の二人妻説話の系譜にある物語等との比較の結果、『はいずみ』に「男の、情、から女の哀しみへの視線のずらし」をみいだし、この物語を「女たちの哀しみを基底に男たちの愚かさを戯画的に描く物語」として位置づけた。卓見であると言えらるだろう。

ただし、竹村氏はこの「女たちの哀しみ」（特に古妻の哀しみ）について、「この古妻の哀しみは、〈二人妻説話〉類型諸話で一話に〈歌徳説話〉性を付与する古妻詠、或いは古妻・男の親に追い出された今妻詠に込められた女たちの哀しみに通い合う」ことも、「物語は古妻の哀しみの深まりを軸に、この哀しみを男が自らのものとしていく過程として展開している」とも述べている。男と古妻の心を叙す部分が増加し、より記述が複雑になったとも言える『はいずみ』が、果たして従来の二人妻説話の系譜にある物語と同様の「女たちの哀しみ」を現出させていると言えるだろうか。また、その「哀しみ」を「男が自らのものとし」たという点についても、若干の疑問を抱く。結論から言えば、『はいずみ』における古妻や男の心理的側面への掘り下げは、先に紹介した竹村氏の説くところとは別の意味でも、彼らの人物像、ひいてはそれらを包含する物語世界に、従来の二人妻説話の型を踏襲する物語からの変質をもたらしたのではなからうかと考えている。

本稿は、一方で二人妻説話の世界をみすえつつ、主に彼らの心理のつぶやきに注目することによつて、『はいずみ』という物語の特質について、考えてみようという試みである。

—

『はいずみ』において語られた、女そして男の心のありようの分

析に入る前に、この物語が主に二人妻説話の伝統や他の文学的形象の中からとりいれた趣向や素材、物語をおおう語りについていささか触れておく。

『はいずみ』は、二人妻説話の系譜につらなる物語にみられた様々な要素をそのままに、またはそこに変形を加えて自らの物語を構成している。すでに拙稿において指摘したのであるが、『はいずみ』の場合、そうした二人妻説話関連の趣向と平中墨塗り譚のそれとがともに活用されるかたちで成り立っている。具体的には、平中墨塗り譚にみえる平中の妻の歌の中の「すみつく（住みつく・墨つく）」が、『はいずみ』の前半と後半の対照に大きく関与しているのではなからうかと考える。物語は、前半部に哀愁漂う古妻を、後半部に滑稽味溢れる今妻を記す。彼女たちの流す「涙」の意味も、対照的になるよう仕組まれている。平中墨塗り譚が、両者の蝶番となる趣向がとられているのである。

さらに、そうした眼でみると、前半に語られた古妻の一時的な大原行きは、次に掲げたような「炭」を焼く地としての同所のイメージを背景に、やはり同音の「すみ」が響かせてあったと考えるべきではないだろうか。

大原に住みはじめけるころ、俊綱朝臣のもとへいひつかはしける
良暹法師

大原やまだすみがまもならばねばわが宿のみぞけぶりたえたる

(『詞花和歌集』巻第十・雑下・三六七)

大原の地に埋もれ「炭つく」かにみえた古妻は、すんでのところでもの翻意によって救われ、あらためて男の許に「住みつく」ことができ、逆に今妻は男の許に「住みつく」ことかなわず、顔に「墨つく」という事態となった。掛詞の妙である。

また、特に『伊勢物語』二十三段との関わりをみるなら、今妻の「化粧」をする（実際はおしろいと間違えて掃墨を塗ってしまうのである）姿は、『伊勢物語』の古妻の「いとよう化粧じて」の姿の反転とみることもできる。「化粧」によって明暗をかけた二人の女。

『はいずみ』は、『伊勢物語』との対照も仕掛けていると言えよう。ところで、『はいずみ』において、古妻と今妻（今妻の場合は、彼女とその周辺と言うべきか）を語る視線は大きく異なる。語り手は、古妻に緊密に寄り添い、今妻を突き放して語る。対照は、こうした側面にも及んでいる。古妻に寄り添う語りは、彼女の心理もまたとらえたのである。

二

『はいずみ』における古妻と男の心の眩きを辿る前に、従来の二人妻説話の系譜にある物語の場合をまず確認しておく。先にも触れたように、従来の伝統の中では古妻の心はそれほどあらわにされていない。『伊勢物語』第二十三段をみる。

さりけれど、このものと女、あしと思へるけしきもなくて、いだしやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひう

たがひて、前裁のなかにかくれるて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとよう化粧じて、うちながめて

風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむとよみけるを聞きて、かぎりなくかなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。
(一五六―一五七頁)

女はおのれの苦惱をおもてに出さない。唯一、「化粧」をして「風吹けば」の歌を詠ずるのみである。彼女の中に湧いたかもしれぬ嫉みや恨み、葛藤は、男への一途な愛情に昇華されて物語の表現の中にたちあらわれる。「伊勢物語」において二人妻説話は、愛と忍耐の美しい物語として形象化されている。

『大和物語』百四十九段にも同話があるが、『伊勢物語』と比べるといくらか説明的になっており、女の深い嫉妬の情が語られる。

この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらになねたげにも見えずなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にはかぎりなくねたく心憂く思ふを、しのぶるになむありける。

(中略) いたうち嘆きてながめければ、(中略) この女、うち泣きてふして、かなまりに水を入れて、胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入る。

(三九五―三九六頁)

他の、例えば「馬槽」の話の『大和物語』五十七段(『今昔物語集』卷三十ノ十にも同話が見える)における一心憂しと思へど、なほま

かせて見けり」や、「鹿」の話の『大和物語』百五十八段(『今昔物語集』卷三十ノ十二にも同話が見える)における「いと憂しと思へど、さらにはいひもねたまず」という女の心についてのわずかな記述を思うと、『大和物語』における女の激しい嫉妬心の叙述は二人妻説話の系譜の中でも異色なものである。

水が熱湯に変わるほどの激しい思いを記したという点では、この『大和物語』の百四十九段の記述にまさるものはないが、しかし局面局面での本音の吐露という点から見ると、『はいずみ』のそれに並ぶものはない。

三

『はいずみ』の古妻の心理を追おう。長年連れ添った男が彼の知り合いの娘に思いをかけ、ついに親公認のかたちでその女の許へ通うようになった、という事態を聞くに及んで、『はいずみ』の古妻は苦惱し続ける。

もとの人聞きて、「今は限りなめり。通はせてなども、よもあらせじ」と思ひ渡る。「行くべきところもがな。つらくなりはてぬさきに、離れなむ」と思ふ。
(五一七頁)

夫の他の女への心交わりに対する深い哀しみがその基底にあるとは言え、『はいずみ』の古妻の苦惱は、『大和物語』百四十九段に記されたような嫉妬の炎に焼き焦がれるといった類のものではなく、これから生ずるであろう不幸な運命を予感して我が身の行く末を思

案するといふものであった。そして、この身の振り方への不安は以後語られる彼女の哀しみの大方を占めるものとなる。

男が今妻の近々の来訪を告白した場面。

女、「ここに迎へむとて言ふなめり。これは親などあれば、ここに住まずともありなむかし。年ごろ行くかたもなしと見る見る、かく言ふよ」と、心憂しと思へど、つれなくいらふ。

(五一九頁)

ここでも、経済的な頼りなさを背景に移り住むあてさえない我が身ををかえりみ、相手の女が引越して来る必要もないのによつて来る、つらく思っている。

しかし、こうした苦惱を古妻は一切おもてに出さない。彼女の不安、哀しきは男のいないところでしばしば「涙」となつて溢れ出した。

「女、使ふ者とさし向ひて、泣き暮す」等。

もとの女の「いづこにか」の歌を小舎人童からうけた男は、女を連れ戻そうと決心し大原へ向かう。男は、女を尋ね歌を詠みかける。対する女は、

「いと思はずに似たる声かな」とまで、あさましようおほゆ。

(五二四―五二五頁)

といった状態。その後、「泣くこと限りなし」であった。男に連れ戻される帰途も、以下のように、

いとあさましく、いかに思ひなりぬるにかと、あきれて行きつきぬ。

(五二五頁)

呆然としていた。男の愛の復活への歓喜よりも、まず事態への非常な驚きと正直な困惑をこそ、『はいずみ』は記した。なお、二人妻の伝統の中では、この時点での古妻の心理はもちろん記されない。

男が心変わりしたために起こる、身寄りのない妻の生きてゆくことに根差した不安と、男の翻意の後の驚きと茫然自失、二人妻の悲劇が古妻にもたらす、夫への愛情だけでは説明しえぬその時々心のひたと眩きとを、『はいずみ』という物語はひろいあつめた。忍耐と夫への一途な愛情との美德によつて、再び幸福をえる古妻の美しい物語が本来抱え持つ、古妻の本音という言わば闇の部分に、『はいずみ』はささやかではあるが光をあてていふと言えようか。

四

こうした苦惱する内面を抱え持つ古妻を前にした男の心を次に述べる。男の眼は、彼女の心の奥底までみとおしえない。今妻の両親にせきたてられてやむをえない状況に立たされたためとは言え、男の行動はいくらか戯画的である。今妻が移り住むので古妻に家を去つて欲しい旨を言い出せない男は、

「かしこに『土犯すべきを、ここに渡せ』となむ言ふを。いか
が思す。ほかへや往なむと思す。何かは苦しからむ、かくなが
ら、端つかたにおはせよかし。忍びて、たちまちに、いづちか
はおはせむ」

(五一九頁)

と誘導尋問にも似たかたちで、古妻に離別を納得させる。男の身勝

手がちらとのぞく。古妻の「涙」を知らぬ彼は、いよいよ彼女が家をあとにする事態に及んでも古妻の美を再発見するという次元であつた。

そんな男であつたが、古妻の「いづこにか」の歌を知ると彼女の哀しみに衝撃をうけ、すぐに彼女を連れ戻しに急ぐ。先に触れたように、思いがけず現われた男に古妻は困惑の体であつたが、彼女の涙にくれるさまを目撃した彼は、ひたすら詫言を述べとにかく共に帰宅する。

よるづに言ひ慰めて、「今よりは、さらにかしこへまからじ。
かく思しける」とて、またなく思ひて、
(五二五頁)

男は、古妻の流した涙をみて「かく思しける」——こんなにあなた
が私のことを思ってくれたのだから、と口になっている。古妻の涙が
これまで自らの運命への不安と哀しみから流されたものであつたこ
とを思うと、大原で流し続けた彼女の涙も男への愛情が流させた涙
だと単純に言い切ることはできない。古妻の心の中には複雑な思い
が渦巻いていたに違いないのである。それを簡単に都合よくうけと
つてしまった男、結局、男と古妻は元の鞘におさまつてめでたしめ
でたしとなるのだが、事態を好転させたこの二人をめぐる小さな誤
解とすれ違ひは興味深い。

『はいずみ』では、古妻の実像と男の眼からみた古妻の像とが微妙にずらされている。二人妻説話を基底に物語を構成するにあつて、そうしたずれを現出させた点にこそ、この物語の特性をみるこ

とができないだろうか。

五

彼女の哀しみに緊密に寄り添う語りによって、本音の吐きが記された『はいずみ』前半の古妻に対して、後半の今妻への物語の視線はかなり冷ややかなものである。

彼女の心はほとんど物語の中に語られることはない。男が古妻と縊りを戻したために、いっこうに男が彼女の許へ通つて来ないという事態に直面した時にも、「父母思ひなげく」とあるのみである。墨塗りの失敗をした時も、男がさつさと帰つてしまったことに心を痛めるのではなく、当然のことかも知れぬがおのれの不気味な姿に衝撃をうけ右往左往するのみであつた。もちろん男は今妻の不気味な変身の原因が何かつきとめる余裕もなく、ただただ恐怖するのみでそそくさと帰つてしまった。ここでも男は戯画的に描かれていると言つてよいだろう。

一体に、この今妻は心底男を愛しているのか。彼女には、例えば『伊勢物語』二十三段の見捨てられてもなお男を待ち続けた哀れな今妻のイメージはない。翻つてみれば、『はいずみ』の古妻も、男を愛するあまり激しい嫉妬にかられる古妻のイメージとは縁遠い。それは、彼女たちが女の哀しみを背負っていない、あるいは我々に感じさせない、と言っているのではない。古妻は生活力の欠如のために生きることそのものに困難を感じる状況にあるし、一方、今妻

は両親の存在にからめとられるように生きている。二人妻説話の伝統が奏でるような男と女の愛憎の世界ではなく、もう少し雑多な問題の渦巻く世界の住人として、物語の中に登場しているという観がある。そんな二人の女の間を、『はいずみ』の男が行ったり来たりしているのである。

おわりに

それまでの二人妻説話の系譜につらなる物語では、やや紋切型にすまされてきた男と女の心理が、『はいずみ』ではかなりことまかに語られていることに注目し、分析を加えた。とりわけ、古妻の眩きとその苦悩から微妙にずれてゆく男の認識は、この物語でつきつめられたとはとても言い難いが、二人妻説話の語型が本来抱え持つ闇の部分——人間の本音を物語の中に顕在化させたと言えよう。あくまで愛と忍耐と風流、そしてそれを解する男といった世界の美学を追求した『伊勢物語』に代表される従来の二人妻の世界と、それはある意味で対極にあるのではないか。二人妻説話の伝統への小さな反乱の物語として、『はいずみ』を位置づけてみたい。

〔注〕

(1) 例えば、神尾暢子氏「掃墨物語の源流素材——堤中納言と伝承説話——」(『大阪教育大学紀要』第I部門第二七卷第一・二号、一九七八年(二月)、竹村信治氏「『はいずみ』考——

『堤中納言物語』私注(一)——」(『古典研究』第一、一九九二年(二月)その他。

(2) 注(1)の竹村氏論文。

(3) 平中説話を中心にした論考に、妹尾好信氏「『はいずみ』小考——典拠としての平中説話の考察を中心に——」(『国語の研究』第一九号、一九九三年九月)がある。

(4) 拙稿「人に『すみつく』かほのけしきは——平中の妻と『はいずみ』の女——」(『国文学攷』第一四二号、一九九四年四月)。

(5) 山岸徳平氏・角川文庫、松尾聰氏・笠間選書、稲賀敬二氏・小学館日本古典文学全集、塚原鉄雄氏・新潮日本古典集成、池田利夫氏・旺文社対訳古典シリーズ、大槻修氏・岩波新日本古典文学大系、その他、「あなたがこんなに悲しい思いをしたのだから」(寺本直彦氏・岩波日本古典文学大系、三巻) 洋一氏・講談社学術文庫、その他)とする解釈もある。

なお、『伊勢物語』・『大和物語』・『はいずみ』の引用は小学館日本古典文学全集、『詞花和歌集』の引用は岩波新日本古典文学大系に拠った。

(付記) 本稿は、平成八年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果である。

——いのうえ・しんこ、日本学術振興会特別研究員——